

浅野太郎氏を悼む

東大教養 阿部龍蔵

若手夏の学校の全体講義を終えて翌日登校したところ、波田野氏からタロちゃんが死んだらしいというショッキングなニュースに接した。まさかと、そのときわが耳を疑ったが、羽田空港で浅野氏の遺骨をお迎えし、彼はついに幽界に旅立ったか、という実感を身にしみて感じた。私と浅野氏との接触は非常にこかったといえるし、あるいはうすかったといえるかもしれない。少くとも、物理学の面においては、同じ頂上を目指す、しかし違った道歩く二人の学徒として、極めて密接な関係をもっていたに違いない。だが、私は彼の個人的な面についてはほとんど無知に近かった。もっとも、ときどき彼のもらす不平というか、つぶやきというか、彼の本心からの告白(?)らしきものを耳にしたことはあるが。

タロちゃんが亡くなったということが確実になってから、彼が渡米直後にくれた手紙のことを思い出した。彼は若干筆不精のようで、駒場の物理教室にもそれほど記録が残っていないらしいので、あえてその全文を紹介したい。

1971. 9. 20.

「ごぶさた致しております。家の都合であわただしく発ちました為ごあいさつにも参らず失礼いたしました。こちらの生活にもやっとなれて参りました。言葉であまり困らなかったのはむしろ意外なくらいでした。勿論下手で hearing は全くだめなのですが、こちらの話す事は何とか通じますし、聞取れない時は向うがくり返してくれますので、結局通じます。Institute は Eternal が少く、Dyson, Regge と他にプラズマをやっている人がいるくらいでこじんまりしています。

東部の町だけあって、やたらとお行儀がよくて気づまりな事です。会議室には Pauli の像が睨んでいますし、図書室には Einstein の人を喰った様な胸像があって、四方をかこむ高いくすんだ色の本棚の前に立つと、何か圧倒される感じですくんでしまいます。日本にいた時は科学史上の人物だと思っていた人々がこちらでは身近にいるのも何とも圧迫感を感じてしまいます。おまけに、Dyson が考えてみろといった問題がむずかしくて参っています。解ければ面白い問題だと思いますが、どうだかわかりません。先生が向いの部

阿部龍蔵

屋で、早く来ておそく帰るので、私も遅くや早帰りは具合が悪く、生れて始めて、一日ちゃんと部屋にいます。何か面白い事があつたらお教え下さい。」

この手紙をもらって、私は多分、その返事を出さなかったと思う。今となつてはいたし方ないことであるが、折角アメリカから便りをくれたのに、それに対して何もしなかった自分の怠慢さをきびしく自己批判したいと思う。

今から3年ほど前、私の研究室で相轉移に関するセミナーをすることにした。音頭取りは永井克彦氏(当時現在東大教養)で、御常連は八幡英雄氏(当時東大理、現在広島大理)、高橋実氏(当時東大理、現在阪大教養)、五十嵐儀孝氏(当時現在東大理)、三村征雄氏(当時東大教養、現在東芝)それに浅野太郎氏であった。このセミナーは、大体半年ほど続いたが、いわゆる東大紛争で、いささか空っぽになった私の頭脳に、物理学の新らしい息吹きを吹きこんでくれたし、とにかく何かをやろうという意欲を湧き立ててくれた。また、当時、教室主任をやっていた自分にとって、物理に接する唯一の機会だったといつても過言ではあるまい。

このセミナーで、浅野氏は生徒の一人であった。彼は Ruelle の教科書にある分布関数に関する難しい話をしてくれたし、また、Ginibre の群論を使った難解な理論を紹介してくれた。セミナー以外にも、ときどき私の部屋を訪れ、“なにか面白いプレプリントはありませんか”とききに来たこともある。今から考えると、ちょうどその頃、彼の頭脳は、Heisenberg 模型への Lee-Yang 定理の拡張という一大事業に占領されていたに違いない。私の部屋に来るのは、たまにはリクリエーションをしようといった気軽な気持ちからであつたらう。その彼が、不幸、交通事故で他界したのはかえすがえすも残念至極である。

浅野氏は、奇行で有名な男でもあつた。物理屋という者は、大体、平均的な人間から見れば変人には違いないだろうが、彼の場合、その度合いが相当ひどかつたように思える。しかし、それはまた逆に彼が非凡な才能の持主であることの反映であつたかもしれない。とにかく、彼はよしきにつけ悪しきにつけ、常識を相当に超越する人間であつた。それが故に、Lee-Yang 定理の拡張というような大きな仕事のできたのであろう。かかる優秀な人材が、われわれの眼前から消えてしまったのは、なんとも残念なことである。

臨界現象の研究が大きな転機を迎えつつある今は、いささかへそ曲りな故人が生存していたら、貴重な意見が聞けたであろうと期待するのは私一人であろうか。今でも、コツコ

ツとドアをたたき、“先生なにか面白いことはありませんか”と彼が私の部屋に入ってくるような気がしてならない。タロちゃんよ、安らかに眠り給え。

浅野 太郎 さんの こと

神奈川大・工・物理 大成 逸 夫

八月も終りの或る暑い日、電話で「今カライッテキマス、ヨロシク」とのみ拙宅に伝言を残されて、浅野さんはプリンストンへ出達されました。普段と変らぬやゝ甲高い声の早口でしゃべられたそうですが、道で擦れ違った時の如くに簡潔な挨拶には、いつものことながらに感心させられました。単刀直入で修飾語を除いた表現法、それは浅野さんの特徴の一でありましょう。

いつの事でしたか、大学院生が集って強磁性の何かについて議論をしていた折に、浅野さんがフラリと入ってこられたので、質問をしましたところ、「磁石力！ ヨク判ラン」と言われただけでした。大学院の初学年の人達に較べれば、遙かに造詣が深くていらっしゃるにもかかわらず、決して思はせ振りをなさりません。もしその時、人々がするように、“誰その理論はこうで、結果はかくかくしかじか”，という具合に説明して下されば、居合わせた大学院生を満足させるには充分でありましたでしょう。しかし、今にして思いますと、「判ラン」の一語の持つ意味の方が随分と重く感ぜられます。

駒場の物性コロキウムでは、当然の事ながら、所謂多体問題的な物性論の話が多くあります。その中で、浅野さんの話し振りは一風変ってしまして、必ずと言って良い程、定理が強調されていたように記憶しています。（浅学な筆者には浅野さんの物理学について評する資格はありません。）手元にあるコロキウムノートを繰ってみますと、例えば、「 He^3 の比熱」について議論されたときには、Ward identity を出発点にされていますし、「Fermi 流体の基底状態」について話された際には、Virial 定理、エルゴード定理、そして $1/k^2$ 定理を用いてその安定性を論じられています。亦、「相転移の理論」を展開された折には、Landau 流の order parameter は、compact な Lie 群であればそれを常に選択できること、を中心的な主題として、Goldstone の定理、Hölder の不等式など、